大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 東洋医学における形神観について：こころと身体



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2020-04-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 王, 財源<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24729/00016781 |

# 東洋医学における形神観について
## ――こころと身体―――

王　　財　源

## Ⅰはじめに

本論は鍼灸を用いて健康を創出する中国の伝統医療文化を基軸として発展した東洋医学に着眼し、精神と肉体が不二なることを中国哲学の観点より論じ、精神が肉体の健康を創出する可能性について言及したものである。古来より受け継がれてきた鍼灸術には人間の精神状態をコントロールすることを基本とした医書文献がある。しかし、現代の鍼灸研究においては、力学的な物理療法を用いた臨床と研究を行い、本来の伝統医学に継承された哲学的な観点より病をみる概念が乏しくなりつつある現状にある。そこで中国古代の医療文化にみえる、鍼灸学における「こころ」（精神）と肉体の結びつきについて、中国古代の医書文献を中心に、現代の臨床家が治療の指針とする、東洋医学の基本的な概念について検討した。

## Ⅱ本論

### Ⅰ　こころと身体をみる東洋医学

東洋医学は中国の伝統医療文化を基軸とし、それぞれの国々で独自の文化を礎として形成された、いわば民俗医学でもある。その中には民間療法として受け継がれてきたものや、研究者により研究が重ねられ、安全性や有効性を示されたものについては、今日の医療として、その実用化に向けて、現代医学を補完する医療技術の一つとして継承され続けている。

これら伝統医療文化の軸足には『黄帝内経』『神農本草経』を初めとする数多の古代典籍がある。とくに中国を中心とする伝統医療文化には、人体の長生術に対する養生法が記されている。その長生術の基本が肉体と精神の調和にある。肉体と精神との関係については戦国時代の『荘子』刻意編に述べられているので論証しておく。

『荘子』

刻意編第十五

「形勞而不休則弊、精用而不已則勞、勞則竭」。

形、勞して休せざれば則ち弊れ、精、用ひて已まざれば則ち勞（つか）る。勞るれば則ち竭くと。

（肉体を休まずに働かせば疲れ、精神を絶えず働かせば疲れる。かく心身共に疲れ果てればついには枯れ尽きてしまう）。

さらに同編には以下の文脈が記されている。

「純素之道、唯神是守。守而勿失、與神為一、一之精通、合於天倫」。

純素の道は、唯神を是れ守る。守りて失うこと勿ければ、神と一たり。一の精、通じて、天倫に合ふ。

（純精素質の道は、唯、この精神に守ることにある。この精神をしっかりと守っていれば、肉体は精神と合一する。合一した精神は、天地自然の理に通じ合う者である[1)]）。

また、漢の司馬遷撰『史記』に、司馬談が「黄老」の影響を受け、加えてそこには道家思想における形神観があるので上げておく。

『史記』巻一百三十

太史公自序第七十

「太史公学天官於唐都、受易於楊何、習道論於黄」。

（太史公、天官を唐都に学び、易を楊何に受け、道論を黄子に習う。

太史公の司馬談は天文についての学問を唐都より学び、周易についての学問を楊何から授けられ、道家の学説については黄子から学習した[2)]）。

「夫神大用則竭、形大勞則敝、形神騷動、欲與天地長久非所聞也」。

夫れ神大いに用ふれば則ち竭き、形大いに勞すれば則ち敝る。形神騷動して、天地を長久なるを欲するは、聞く所に非ざるなり。

（人の精神は使いすぎれば涸渇し、肉体を酷使すれば困憊する。肉体と精神が共に正常でなくなって、天地と共に長久でありたいと願うのは今まで聞いた

ことはない[2])。

これら先人のもつ身体観は肉体を「形」とし、こころを「神」とし、この両者は絶えまなく結びついているのである。よって古来より「形」と「神」を分離させるような長生術は考えられなかったという。

そこで医書『黄帝内経』素問にみる形体と精神の関係について言及しておきたい。

『黄帝内経』素問

上古天真論篇第一

「外不勞形於事、内無思想之患。以恬愉為務、以自得為功、形體不敝、精神不散。亦可以百數」。

外では、形を事に労せず、内に、思想の患い無し。恬愉を以て務めと為し、自得を以て功と為し、形體、敝れず、精神、散ぜず。亦た百を以て數うべし。

（外では体を過労させず、内ではこころが患わないようにする。こころを落ち着かせて、自らが得た功で満足する。すると肉体は疲れず、こころも消散することがない。歳は百まで全うするのである）。

ここには医書『黄帝内経』に於ける長生術の基本がみえる。

これらが明代の『普済方』『類経』『景岳全書』清代の『遵生八箋』に同文が繰り返し用いられていることから考えても、近代にまで受け継がれてきたことが理解できる。その背景には、古代中国に淵源をもつ道家の養生思想に端を発するのである。とりわけ道家のもつ養生思想には、若さを保ち続け、健康を願うという人類永遠の課題がみえる。

先人らはそれらを克服するために、自己の生命と自然や宇宙との調和を注視した。

つまり、自己の生命と自然界のエネルギーとの結びつきを目的とする、天人合一や内外合一という思想が広く民衆に流布し、実践されていたのである。そのひとつに神仙思想を上げることができる。神仙思想には不老不死、若き肉体をつくるための具体的な長生術があり、老いを防ぐことを先人らは注視したのであろう。その根拠は『抱朴子』や『真誥』などにもみられる。

先ず、葛洪（261-341ごろ）の『抱朴子』には精神と肉体との関係を示した興味深い考え方が記されている。

『抱朴子』外篇、巻三

博喩第三十八

「抱朴子曰、體粗者繫形。知精者得神。原始見終者、有可推之緒。得之未朕者、無假物之因、是以書見天地」。

抱朴子曰く、體の粗き者は形に繫り。知の精なる者は神を得る。始めを原ね終りを見る者は、推る可きの緒有り。これを未朕に得る者は、物の因に假ることなし。書、天地を見るは（未だ明と称するに足らず[3]）。

（抱朴子が言う、粗いところしか判らない人は外形にとらわれているのだ。微妙なところまで判る人は精神をつかんでいるのだ。始めのところを尋ねて終わりまで見抜ける人は、そこから推論しうる端緒をつかんでいるのだ。何の兆しもないのに見通せる人は、形のある物をかりてそれによりかかる必要がないからだ[4]）。

『抱朴子』内篇、巻一

至理巻五

「形者、神之宅也」。

形は神の宅なり。

（形は神の住処である）。

「身勞則神散、氣竭則命終」。

身を労すれば則ち神は散じ、氣か竭れば則ち命を終える。

（肉体が疲れ果てれば、精神はとび散る。元氣がなくなれば、命は終わる[5]）。

梁代の医家、陶弘景（456-536）も肉体と精神との関係について論及している、それが『真誥』にみえる。

『真誥』

運題象篇

「面者神之庭、髪者脳之華、心悲則面燋、脳減則髪素、所以精元内喪、丹津損竭也、妾有童面之経、還白之法、可乎、精神体之神、明者身之宝、労多則精散、営竟則明消、所以老随氣落、耄巳及之」。

面は神の庭、髪は脳の華、心悲しめば則ち面燋、脳減ずれば則ち髪素く、所

以に精元は内に喪す、丹津は損ない竭なり、妄有り童面の経あり、還白の法と乎可し、精神は体の神、明なるは身の宝、多く労すれば則ち散精じ、営竟すれば則ち明消え、所以に老いに随いて氣落ち、これ耄巳に及ぶ。

（顔は精神の庭、髪は脳の華、心に悲しみがあると顔はやつれ、脳が衰弱すると髪は白くなる。だから、精氣の根源が内部で失われ、丹を失い津液が枯渇する。私には若々しい童顔を保つ経典、白髪を黒髪にもどす方法がある。精氣は肉体の神、視力は身体の宝である。苦労が多ければ精氣は消散し、あくせくし過ぎると視力も消散している。だから氣力が衰えるにつれて老いが訪れ、ついで耄碌してしまうのである[6)]）。

興味深いことに明代の養生書、高濂撰、『遵生八牋』巻一、清修妙論牋上を引用した『續博物誌』の中にも陶弘景の『真誥』運題象篇の文を引用している。

「面者神之庭、髪者脳之華、心悲則面焦、脳減則髪素、精者體之神明者身之寶、勞多則精散、營竟則明消」。

注目すべきは、ここに載る心悲則面焦（心に悲しみがあると顔はやつれる）について『唐書』から引いた「形」と「神」についての記載がある。

「『唐書』有云、多記損心　多語耗氣、心氣内損、形神外散」。

（『唐書』に云々有り、多くは心の損ないを記し、多くは氣の消耗を語る、心氣、内に損なえば、形神外に散る）。

長生術の淵源については、1973年に中国の長沙でみつかった馬王堆漢墓に長生術の萌芽がみられる。馬王堆三号漢墓から出土した複数の房中術関連の書物には、いずれの内容をみても「氣」と老化の関係性が指摘され、不老不死の肉体を作るための具体的な技法が随所にみえる。とくに『天下至道談』という書籍は哲学的な内容を示唆するが、巻首と巻末を除いては、ほとんどが房中の技法であり、身体の「氣」を保つための方法がみえる。また、『天下至道談』のみならず、同様に馬王堆漢墓から出土した『合陰陽方』『十問』にも長生、養生の概念が記されている。

これらの典籍についての特徴には、後世に受け継がれた『黄帝内経』素問、『黄帝内経』霊枢、また、九八四年、日本の丹波康頼による日本最古の医書『医心方』にも、馬王堆出土資料に載る「耳目葱（聰）明」「通神明」という記述が共通して記されていたので

ある。

此処に記載された「耳目葱（聰）明」とは、聴覚と視力がハッキリしている状態を示し、「通神明」とは、こころの状態が安定し、思考する能力が保たれていることを言う。

したがって、長生術を実践することが、脳の活動を正常に保ち続けることができるという。その概念が、古来より現代の中国や日本の伝統医学にまで伝わった。

そこで医書にみる「耳目葱（聰）明」を記した文脈を上げておく。

『黄帝内経』素問

生氣通天論篇第三

「如是則内外調和、邪不能害、耳目聰明、氣立如故」。

是の如くは則ち内、外は調和し、邪は害すること能わず、耳目は聰明にして氣は立ちどころに故の如し。

（このような状態でれば内外は調和し、外邪が身体を害することはできない、聴覚や視力は正確で氣は安定した状態を保つ）。

『黄帝内経』素問

陰陽應象大論篇第五

「有餘則、耳目聰明、身體輕強、老者復壯、壯者益治」。

有餘なるときは則ち、耳目、聰明にして身體は輕強なり、老者も壯に復る壯者は益々治す。

（余りあるときは、耳はよく聞こえ、目はハッキリとみえる。身体は軽くて強い、老いても壮年のように回復し（若返り）、壮年はさらに強壮となる）。

『黄帝内経』霊枢

始終第九

凡刺之道、氣調而止。補陰瀉陽、音氣益彰、耳目聰明、反此者血氣不行。

凡そ刺の道は、氣を調えば而ち止む。陰を補い陽を瀉すれば、音氣益々彰かにして、耳目は聰明なり。此に反する者は血氣めぐらず。

（刺鍼の道理は、氣を調えることにある。陰を補い陽を瀉せば、音声はより明らかになり、耳はよく聞こえ、目はよくみえる。これに反するものは血氣の流れが悪くなる。）

上記の医書文献をみる限り、身体内部の「氣」が衰えると、身体の外部につながり、耳や目が老い、外部の身体所見の一部として正確に現れてくることが記されている。

即ち、体内の「氣」の病変が体外に現れることから、古来より体内の反応が体外にあらわれるという基本概念が医書では成立していたのである。

## Ⅱ　体壁の反応は体内部の病変を示す鏡であった

身体の健康が人の「氣」と、蔵府の働きによる生理的な活動により保つことができるという。その理論が、すでに『黄帝内経』素問や霊枢によって記されていた。

『黄帝内経』素問
　陰陽応象大論篇第五
「以表知裏」
（表面の〈症状〉を以て裏面の〈病状〉を知る）。

『黄帝内経』
　霊枢外揣第四十五
「故遠者司外揣内、近者司内揣外」
（よって、遠とは外から内部〈病変〉を推測し、近とは内部の〈病変〉から外部に現れる症状を推測する）。

上記の文脈から考えると、中国伝統医学には体表部から体内の病変を探り、反対に体内の病変から体表に現れる症状を知ることを治療の原則としていた。

中国の郭靄春による『黄帝内経素問校注語訳』の注記では『黄帝内経』霊枢、外揣編に載る「故遠者司外揣内、近者司内揣外」の〝司〟について、〝司〟は〝伺〟と読むとある。慧琳『音義』巻六、『考声』を引き、〝伺、察也〟とある[7]。つまり、此処に載る〝司内〟と〝司外〟は、内外を観察、診察するとの意味で受け止められると言う。

また、「故遠者司外揣内、近者司内揣外」の注に、馬蒔（16世紀）が、遠と近について解釈に、人の音（声）や色は〝遠〟と呼び、人の五臓を〝近〟としたとある。よって、体内部の生理的な活動を改善することが、外部の体表に通じると言う。

内外を示した伝統医学の概念は薬草にもある。『神農本草経』などの医書文献をみる

と、植物を用いて身体の内部の働きを改善し、体表の肌に潤いを与えて、みずみずしい肌を保ち、老いを防ぎ、身体の動きを軽やかにするという文脈が記されているので上げておく。

『神農本草経』
白芷が
「長肌膚、潤沢顔色、可作面脂[8)]」
肌膚長ずれば、顔色潤沢、面脂を作る可し。

翹根が
「令人悦沢、好明目、久服軽身耐老[9)]」
人に悦沢を令すれば、明目を好み、久しく服すれば身軽るく老に耐え。

いずれも自然界で育った植物が、健康的な身体を作ることができるという。

## Ⅲ　伝統医療文化が示す〝内〟と〝外〟についての身体的概念

先に述べたが、古代の中国医学書をみる限り、人体内部にある五臓六腑や氣血津液の反応が体表（皮膚、筋など）などに現れるという。そのために先人らは体表部に出現するさまざまな反応から肉体内部の病変を知る。そこで身体の内外の関係について中国哲学の観点より考察してみた。

身体の内部と外部の相関性については、「内外合一」（内部と外部は１つである）という概念が医書中ではすでに成立し、現在の中華人民共和国の「中医学基礎理論」統一教科書でも、一般的に引用されている。その「内外合一」観の根拠を提示したい。

まず医学書ではないが『礼記集説』に、伝統中国医学の治療指針を彷彿とさせる概念がある。そこで医書との結びつきをみる。

『礼記集説』巻九十六
「有諸内必形諸外」
（内に有るものは、必ず形となって外にあらわれる[10)]）。

これらは体内の病変と体表に現れる反応は結びついているため、内部と外部は結びつ

き、切り離すことができないという中国医学理論に通じる考え方である。

しかしながら、医書『黄帝内経』をみると、興味深いことに『礼記』などに載る〝内〟が、医書『黄帝内経』では体内の蔵府や氣血津液のみを示しているのではなく、精神状態にまで通じているのである。

医書における肉体の外部（表面）に形となって現れるという形と神（精神）に対する概念をここで上げておきたい。

『黄帝内経』素問
宝命全形論篇第二十五
「一曰治神　二曰知[11]養身　三曰知毒薬為真　四曰制砭石小大　五曰知府藏血氣之診」。
（一に曰く、神を治す、二に曰く身を養うことを知る、三に曰く毒薬をもて真と為すことを知る、四に曰く、砭石の小大を制す、五に曰く、府蔵、血氣の診を知る[12]）。

宝命全形論をみると「神」を治すことが第一番目に上げられている。二番目に「身」（形）を養うと記している。このことから、医書『黄帝内経』では〝神〟すなわち精神内面の調和を優先させることから始まっているのである。

「神」は〝内〟に位置づけられるため、内外合一の〝内〟の文字には「神」の調和を優先し、次に〝外〟である肉体（「形」）を重んじていることがみえる。

これら「神」の存在については、前漢の武帝の頃、淮南王劉安（紀元前一七九年–紀元前一二二年）編纂による思想書『淮南子』にみえる。

『淮南子』巻一「原道訓」〝夫形者、生之舍、氣者、生之充也、神者、生之制也〟
夫れ形は、生の舍、氣は、生の充なり、神は、生の制なり。
巻二「俶真訓」〝志与心変、神与形化〟。
志は心の変を与え、神は形の化を与えん。
巻六「覧冥訓」〝精神形于内〟。
精神形は内になす。
巻七「精神訓」〝外束其形、内総其徳〟。
外は其の形を束ね、内は其の徳を総す。

このようにして、中国で受け継がれた伝統医学の文献には、医療が人間の精神に着眼していたことが記されている。経験則で受け継がれた幾多の文献には、心理的素因を基礎とする、複数の病変を知ることの重要性が、中国の哲学観により成立していた。

とりわけ『黄帝内経』の巻首には、『老子』からの一文を引用して、精神が肉体の働きと深く関係することが述べられている。

『重広補注黄帝内経素問』巻第一
上古天真論第一
「恬淡虚无、眞炁従之、精神内守、病安従來[13)]」
恬淡虚無なれば、真氣之に従い、精神内に守る、病安んぞ従い来らんや。
（心がけは安らかで静かであるべきで、貪欲であったり、妄想したりしてはならない。そうすれば真氣が調和し、精神もまた内を守ってすりへり散じることはない[14)]）。

ここにみる「恬淡虚无」という『老子』の思想が、医書『黄帝内経』と結びついている。その具体例を上げておく。

『雲笈七籤』巻五十九
諸家氣法　延陵君修養大略
「信哉!是故須知形神之理、養而全之、審内外之病」。
（すべからず形神の理論を知り、養うことを全うし、内外の病を審らかにする）と、道家の思想にも、養生の法則があることが記されていた[15)]。

『雲笈七籤』をみても精神を養うことが、健康を保つ基本であるという。このことは古来よりの中国伝統医学に哲学が共生していたことが理解できる。

## Ⅳ　五蔵と精神の関係を明らかにする

医書にみる「こころ」が伝統医学でいう「神」が、感情でつながるという蔵府学説の概念について明らかにしたい[16)]。

先ず、当時の医家が人体と「こころ」について、先人らはどのような概念を持っているのかみてみたい。

『黄帝内経』霊枢

本神篇第八

「何謂德氣[17]、生精、神[18]、魂、魄[19]、心、意、志、思、智、慮、請問其故」

何をか徳、氣は精、神、魂、魄、心、意、志、思、智、慮を生ずると謂うか、請うその故を問わん。

(徳、氣が精、神、魂、魄、心、意、志、思、智、慮を生ずるとは、どのようなことなのかを問いたい)。

「岐伯答曰、天之在我者德也、地之在我者氣也、德流氣薄[20]而生者也、故生之來謂之精[21]兩精相搏[22]謂之神、隨神往來者謂之魂、並精而出入者謂之魄[23]、所[24]以任[25]物者謂之心、心有所憶謂之意[26]、意之所存謂之志、因志而存變謂之思、因思而遠慕謂之慮、因慮而處物謂之智、故智者之養生也」。

(岐伯答えて曰く、天の我にあるものは徳なり、地の我にあるものは氣なり、徳流れ氣薄まって生ずる者なり。故に生の来るは、之を〝精〟と謂う、両精相い搏つ、之を〝神〟と謂う、心に随いて住来するもの、之を〝魂〟と謂う、精に並びて出入するもの、之を〝魄〟と謂う、物に任ずる所以のもの、之を〝心〟と謂う、心は憶するところあり、之を〝意〟と謂う、〝意〟の存するところ、之を〝志〟と謂う，〝志〟に因りて存変する、之を〝思〟と謂う、〝思〟に因りて遠く慕う，之を〝慮〟と謂う、〝慮〟に因りて物に処する、之を〝智〟と謂う、故に〝智〟は生を養うなり)。

(岐伯は答える。天が私たちに徳（自然界のエネネルギー）を与え、地が私たちに氣（自然界でとれる穀物や果物）与えたのです。天の徳は流れて地の氣と結合し、人が存在することができます。生の最初の物質を精とよびます。男女の交わりにより、二つの精が結合したものを神といいます。神に随って往来する神の活動を魂といいます。精と並んで出入りするものを魄とよびます。ものごとを適切に処理するのは心であります。心に記憶されものを意といいます。意の知ることを志という。よって、志の変化に応じるこころの働きを思といいます。思考が近くから遠くまで及ぶものを慮と言います。考慮したものを処理するものを智といいます。故に智あるものは生を養うのです)。

上文から先人が明らかに人体と精神との関係性を検討していたことが理解できる。

興味深いことに、此処に載る文脈が、晋代の皇甫謐撰『鍼灸甲乙経』にも引用されていることから、上文が鍼灸学の治療の理論として、また、鍼灸治療時の「形」と「神」に対する術者の治療姿勢として強調されていた。また、注目すべきことは、〝精〟は生殖を司る「兩精相搏」の〝精〟と、体を活動させる「並精而出入」の〝精〟と分類しているところにある。「神」は兩精（男女の）相搏が合体すると現われるものであり、「神」に生命を維持するための中枢的な存在である。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第七
宣明五氣篇第二十三
「五藏所藏。心藏神」。
五藏の藏する所。心は神を藏す。
（五蔵にはそれぞれが蔵しているものがある。心蔵は神を蔵する[27]）。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第三
六節蔵象論篇第九
「心者、生之本、神之變也。其華在面、其充在血脉」。
心なる者は、生の本、神の変なり。其の華は面に在り、其の充は血脈にあり。
（心は生命の根本をなすもので、智慧や変化の源である。心の栄華は顔面部に現れ、その機能は血脈の充実している様子に現れるのである[28]）。

五臓の心は生命の根本をなし、智慧や変化の源であるという。心の栄華は顔面部に現れる。その機能が血脈の充実している様子に現れるので、顔面の血色が五臓の心の虚実と関係していることが理解できる。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第三
霊蘭秘典論篇第八「心者君主之官也、神明出焉」。
心なる者は、君主之官なり。神明焉より出ず。
（心は君主にたとえられ、精神、意識、思惟活動などは、みなこれから出るのである[29]）。

唐の楊倞註『荀子』にも心についての記載がある。

『荀子』巻十五
解蔽篇第二十一
「心者形之君也。而神明之主也。出令而無所受令。自禁也。自使也。自奪也。自取也。自行也。自止也」。
（心は形の君である。神明の主である。令を出すが令を受けることはない。自ら禁じ、自ら使い、自ら奪い、自ら取り、自ら行き、自ら止まるのである。）

また、神明（精神）が乱れた時の具体的な状態が、古医籍では次の内容で記されていた。

『重廣補注黄帝内経素問』巻第五
脉要精微論篇第十七
「衣被不斂、言語善悪、不避親疏者、此神明之亂也」。
衣被斂めずして、言語の善悪、親疏を避けざる者は、此れ神明の乱れなり。
（病人が煩悶して衣服を正しく着けることができず、言語が錯乱して親疎遠近の区別がつかなくなったものは、一種の譫語であり、神明が乱れてなったものである[30]）。

ここには病人が煩悶して衣服の着脱ができず、言語が錯乱して親疎遠近の区別がつかなくなったものは、神明（精神）の乱れによるものとしている。

以上の論述を踏まえて、東洋医学でいう長生（長寿）とは、精神の働きを主眼に置き、肉体である「形」と「神」の調和を基軸にして治療していくところにある。その結果、体外に表出されるものとして、活き活きとした、潤いのある肌と肉体、健康と若さである。これらを保つ秘訣が、前述した『黄帝内経』を始めとする複数の文献をみても明らかである。

## V　結び

健康の底流に脈打つ思想には、伝統医療文化で培われた人間の精神と大自然の営みとの中にある「氣」と『霊枢』みる「徳」（精神魂魄）の共生を主とした、人間の内発的な力の開花にある。このことが内面の変化を外面の健康を表出させるという。

スイスの歴史家であるヤーコブ・ブルクハルトは「人間の完全な内実」[31] が健康的な身体を作り上げ、自我の発見が、美しい心身の容貌にまでつながると言う。

このことは『淮南子』『抱朴子』『真誥』などの中国哲学や『黄帝内経』等々の中国医書をみても共通していた概念である。

東洋医学が中国哲学を基盤として成立し、多様化する今日の複雑な病変に対して、東洋医学が現代医療を補完する。このことが今後の研究課題であろう。

**引用文献及び注釈**


1) 市川安司、遠藤哲夫著、新釈漢文大系『荘子』下、第八巻、明治書院、1967年、450-452頁。

2) 青木五郎、新釈漢文大系第120巻、『史記』十四（列伝七）、明治書院、1993年、83頁。

3) 御手洗勝著『抱朴子』外篇簡注（三）、広島大学文学部中国哲学研究室、1968年、999頁。

4) 本田濟著『抱朴子外篇２』平凡社、2002年、71頁。

5) 王明、抱朴子内編校釈、中華書局、1985年、110頁。本田濟他訳、中国古典文学大系第八巻『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』平凡社、1969年、41頁。

6) 吉川忠夫、麥谷邦夫.眞誥研究（訳注編）. 京都大学人文学研究所. 2000：53.。

7) 郭靄春編. 黄帝内経素問校注語訳. 貴州教育出版社. 2010年. 318頁。

8) 森立之校勘『神農本草経』巻中、盛文堂、1971年、８頁の表。

9) 森立之校勘『神農本草経』巻下、盛文堂、1971年、11頁の裏。

10) 南宋、衛湜撰『礼記集説』、欽定四庫全書、経部、台北国立故宮博物院所蔵本、文淵閣四庫全書、第119冊所収、驪江出版社、1998年、114頁。

11)『太素』には“知”を“治”に作るとある。郭靄春編. 黄帝内経素問校注語訳. 貴州教育出版社. 155頁。

12) 家本誠一. 黄帝内経素問訳注第二巻. 医道の日本. 2013. 112頁。

13)『正統道藏』洞真部、衆術類所収の馬承禎撰「修眞精義雜論」愼忌論に同文が載る。

14) 島田隆司訳を所収する『現代語訳・黄帝内経素問』（上）、東洋学術出版社、2006年、32頁。

15) 張君房編、李永晟点校『雲笈七籤』三、中華書局、1988年、1298頁。

16) 王財源『わかりやすい臨床中医蔵府学』第三版、医歯薬出版、2013年、21-22頁。

17) 〝徳〟と〝氣〟は同義語で宇宙を構成する基本物質。張介賓は「肇生之徳本乎天、成形之氣本乎地」とある。郭靄春編. 黄帝内経霊枢校注語訳. 貴州教育出版社.

2010年．81頁。

18）人の生命とある。前掲．黄帝内経霊枢校注語訳．81頁。

19）楊上善は〝魂者、神之別霊也〟張介賓は〝魄之為用、能動能作、痛痒由之而覚也〟。”前掲．黄帝内経霊枢校注語訳．81頁。

20）〝薄〟は〝搏〟に通ずる。

21）氣と生と精の繋がりが馬王堆漢墓より出土した『十問』に〝治氣之精、出死入生〟（氣の精を治むるは、出でて死し、入りて生く）とある。馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会．大形徹著．胎産書、雑禁方、天下至道談、合陰陽方、十問の注に〝治氣之精〟に『管子』内業編の〝精也者、氣之精者也〟（精なる者とは、氣の精なる者なり）という句がみえると載る。東方書店、2015．299頁を参照した。

22）『素問』宣明五氣篇には『霊枢』『霊枢略』を引き〝薄〟に作る。張介賓は〝兩精者、陰陽之精也。搏、交結也〟とある。前掲．黄帝内経霊枢校注語訳．81頁。

23）清の医家で本草備要、医方集解の著者である汪昂（1615-1700ごろ）は〝魄は陰に属し、肺は魄を蔵し、人の運動は魄に属す〟とある。

24）『甲乙経』巻一第一は〝可〟に作ると載る。前掲．黄帝内経霊枢校注語訳．81頁。

25）『廣雅』釈詁に〝任、使也〟。

26）楊上善〝任物之心、有所追憶、謂之意也〟。前掲．黄帝内経霊枢校注語訳．??頁。

27）藤山和子訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、408頁

28）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、183-185頁。

29）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、161-164頁『黄帝内経素問補註釋文』巻之八、霊蘭秘典論篇、『黄帝内経素問遺篇』巻之三、『黄帝内経素問遺篇』巻之五に同文がある。

30）庄司良文訳所収『現代語訳・黄帝内経素問』上、東洋学術出版社、2006年、273-275頁。

31）柴田治三郎責任篇集・訳『世界の名著45』「人間の発見」中央公論社、1981年、350頁。